



クロード・モネ、ジャスミンの家の庭にて、1915-1920年頃 写真
Claude Monet in the garden of his house at Giverny (Ervil), ca. 1915-1920 © Pierre Chouffol / Roger-Viollet
モナリザの姿を描くマティス、ジャスミン・ニース・ヴィル・マティス邸にて、1928年 写真、マティス・ヴィル・マティス
Henri Matisse painting the model Zola at 1 Place Charles-Félix, Nice, 1928 Photo: Archives Henri Matisse

絵筆をとるために、庭を造った。部屋を飾った。
2020.4.23-11.3

モネとマティス もうひとつの楽園

MUSEUM OF ART POLA MUSEUM

Monet and Matisse: Visions of the Ideal
絵筆をとるために、庭を造った。部屋を飾った。



モネとマティス もうひとつの楽園

「モネの庭」と「マティスの室内」。

2人の画家が、屋外と室内に創りあげた「楽園」と、絵画制作の秘密をひもときます。

19世紀から20世紀にかけて、急速な近代化や度重なる戦争といった混乱した社会状況のなか、「ここではないどこか」への憧れが、文学や美術のなかに表れます。なかでもクロード・モネ(1840-1926)とアンリ・マティス(1869-1954)は、庭や室内の空間を自らの思うままに構成し、現実世界のなかに「楽園」を創り出した点において、深く通じ合う芸術家であると言えます。

モネは19世紀末、近代化するパリを離れ、ジヴェルニーに終の住処を構えます。邸宅の庭で植物を育て、池を造成し、理想の庭を造りあげたモネは、そこに日々暮らしながら、睡蓮を主題とした連作を制作しました。一方、南仏に居を構えたマティスもまた、テキスタイルや調度品を自在に組み合わせ、室内を演劇の舞台さながらに飾り立てて描きました。こうしたモチーフは、南仏の光とともにマティスのアトリエと作品を彩ったのです。

モネの庭とマティスの室内。彼らの「楽園」は、欠くことのできない主題であると同時に、制作の場であり、生きる環境でもありました。本展覧会では、ふたりの芸術家がいかにして「楽園」を創りあげ、作品へと昇華させていったのかを検証します。

会 期： 2020年4月23日(木)－11月3日(火・祝) 会期中無休 ※会期中に展示替えがございます

開 館 時 間： 9:00-17:00(最終入館は16:30)

主 催： 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

後 援： 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

会 場： ポーラ美術館(神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)／TEL:0460-84-2111

入 館 料： 大人 1,800円(1,500円)、シニア(65歳以上) 1,600円(1,500円)、大学・高校生 1,300円(1,100円)、中学生以下は無料

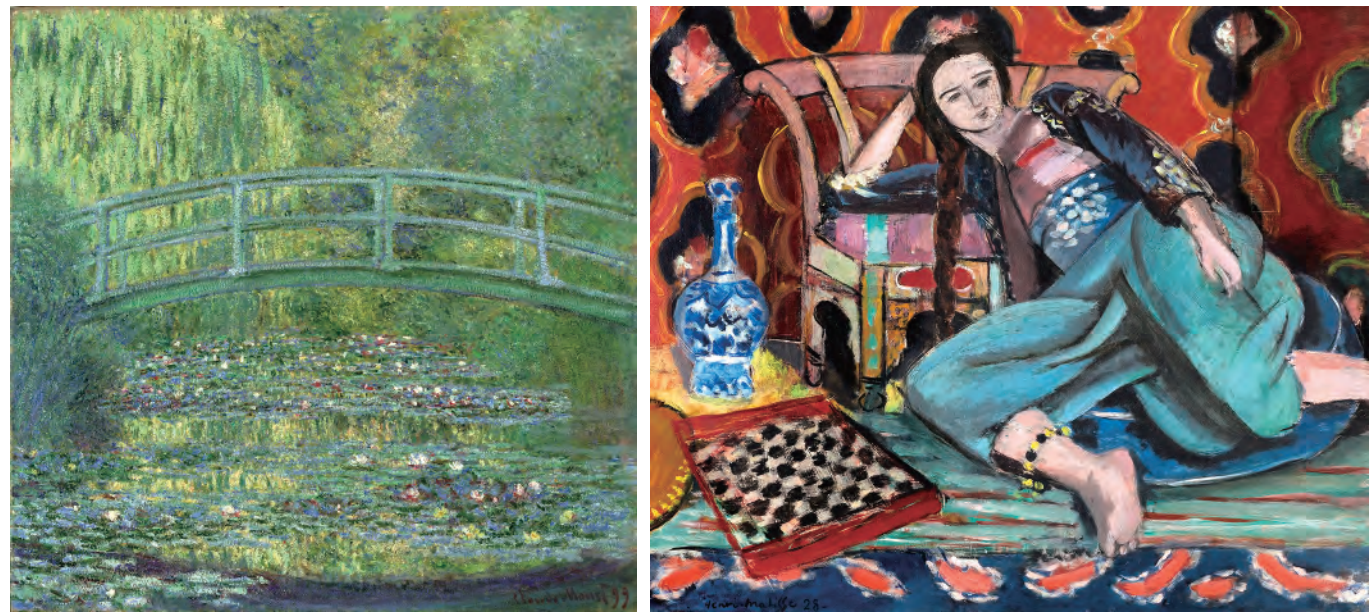
※ ()内は15名以上の団体料金 ※ いずれも消費税込

みどころ

01

印象派の画家モネとフォーヴィスムの画家マティス。対照的なふたりに焦点をあてた初の展覧会。

絵画制作の上での理想的な環境という「楽園」を追い求めたモネとマティス。舞台装置を設えるように、自身の描きたい空間をまずは現実の世界に創りあげたうえで、絵画に描いています。風景と室内を主題とした、対照的なふたりの画家に共通する作品制作の背景に迫ります。



左：クロード・モネ《睡蓮の池》1899年 ポーラ美術館蔵
右：アンリ・マティス《トルコの椅子にもたれるオダリスク》1928年 パリ市立近代美術館蔵 Musée d'Art Moderne de la Ville de Paris ©Musée d'Art Moderne/Roger-Viollet

みどころ

02

海外10ヵ所、国内21か所から、モネとマティスの名品が集結。その数、約90点。

モネ・コレクションで著名なマルモッタン・モネ美術館や、マティス生まれ故郷であるル・カトー＝カンブレジのマティス美術館をはじめとした海外10ヵ所から約20点、国内21ヵ所から約30点の名品の借用が実現。当館収蔵のモネ作品19点、マティス8点とあわせて、約90点を展覧します。



左：クロード・モネ《小舟》1887年 マルモッタン・モネ美術館蔵 Musée Marmottan Monet, Paris ©Musée Marmottan Monet, Paris, France/Bridgeman Images
右：アンリ・マティス《ヴァイオリン・ケースのある室内》1918-1919年 油彩／カンヴァス 73.0×60.0cm ニューヨーク近代美術館蔵 The Museum of Modern Art, New York, Lillie P. Bliss Collection, 1934 ©2019, Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

みどころ

03

2020年はモネの生誕180周年。この記念年に「睡蓮」の連作11点を展示します。

モネがジヴェルニーの敷地に造りあげた庭は、描きたいモチーフを理想的な状態にコントロールできる「楽園」でした。ここで描いた「睡蓮」の連作を、太鼓橋を中心に睡蓮の池と周囲の柳を描いた初期作品から、荒々しい筆致により抽象化の様相をみせる晩年のものまで、11点を展覧します。



左から順に：クロード・モネ《睡蓮》1907年 油彩／カンヴァス 径80.7cm サン・テティエンヌ・メトロポール近現代美術館蔵 Musée d'Art Moderne et Contemporain de Saint-Étienne Métropole ©Yves Bresson/Musée d'Art Moderne et Contemporain de Saint-Étienne Métropole、クロード・モネ《睡蓮》1907年 アサヒビル大山崎山荘美術館蔵、クロード・モネ《睡蓮の池》1899年 ポーラ美術館蔵、クロード・モネ《睡蓮》1907年 ポーラ美術館蔵

みどころ

04

日本で約10年ぶりに、マティスの大規模展を開催。

日本国内のコレクションが少なく、まとめて見られる機会の少ないマティス。20世紀初頭にフォーヴィスムの画家としてデビューし、「自分の絵のなかに完全な調和を作り上げたという感じを持つまで続ける」と語ったマティスの創作へのこだわりを、油彩画約30点をはじめ挿絵本、タペストリーなど幅広いジャンルの作品から辿ります。

フォーヴィスムとは
1905年のサロン・ドートヌでマティスらの作品の強烈な色彩と荒々しい筆致が「フォーヴ」(野獣)と評されたことに由来する美術の動向。



アンリ・マティス《鏡の前の青いドレス》1937年 京都国立近代美術館蔵



クロード・モネ Claude Monet

1 「ここではないどこか」を求めて 旅を糧としたモネとオリエンタリズムに傾倒したマティス

ツール・ド・フランス —モネのフランス周遊紀行

芸術の都パリを中心に展開した印象派の運動の中心的存在として、モネはパリと郊外における近代化された風景を描き、名声を高めました。一方でフランスの各地を訪れて戸外制作を行い、その土地ならではの景観や賑わい、そして豊かな自然を取り上げました。年齢を重ねながら風景画の制作を続けていくうち、モネは次第に都市の喧騒から遠ざかり、独自の風景表現を探るようになります。旅を糧としながら新たな風景を発見し、絵画へと描き留めた画家の足跡を辿ると、モネならではのフランス周遊紀行の道程が浮かび上がることでしょ

上：クロード・モネ《サン＝ラザール駅の線路》1877年 ボーラ美術館蔵
下：クロード・モネ《ポール＝ド・モワの洞窟》1886年 茨城県近代美術館蔵



東方からの啓示 —マティスにおける異国趣味

植民地主義を背景に、美術においてもオリエンタリズムが19世紀に全盛期を迎えましたが、マティスもまた、イスラム美術や日本美術から空間表現や色彩など多くを学びました。とくにイスラム美術に見られる、画面を覆いつくすような装飾模様の表現からは大きな影響を受けています。またモロッコなどへ旅し、テキスタイルや調度を持ち帰りました。1920年代には異国風の装束を身につけた女性をモデルに制作し、特徴的な形をした中東の火鉢などもたびたび登場します。

上：アンリ・マティス《石膏のある静物》1927年 石橋財団アーティゾン美術館(旧ブリヂストン美術館)蔵
下：アンリ・マティス《立つオダリスクと火鉢》1929年 ビエール・アンド・タナ・マティス財団コレクション蔵
The Pierre and Tana Matisse Foundation Collection, New York ©Chris Burke Studio, NY

アンリ・マティス Henri Matisse



2 理想の地を見つけた モネとマティス キーワードは「光」

ジヴェルニー —地上の楽園

都市の喧騒から離れて、自然豊かでのどかなジヴェルニーの村に落ち着いたモネは、1890年に邸宅を購入し、風景画を描くための理想的な環境を整えるため、庭の造成を開始します。四季折々の植物が咲きほこる「花の庭」、そして日本風の太鼓橋を架けた睡蓮の池のある「水の庭」を整備したのち、自らの管理の行き届いた環境を、連作という形式で描き始めました。時間や季節、そして天候といった気まぐれな自然がもたらす移ろいゆく光の探究を進展させるうえで、モネの理想を実現した誰にも煩わされることのない庭は、人工的でありながらも、自然のアトリエとしての役割を果たしたのです。

上：クロード・モネ《睡蓮の池》1899年 ボーラ美術館蔵
下：クロード・モネ《ジヴェルニーの村の眺め》1886年 みぞえ画廊蔵



ニース —銀色の光

1917年、第一次世界大戦が激化するなか、ニースを訪れたマティスは、「毎朝この光が見られるのだとわかったとき、自分の幸福が信じられなかった」と述べるほど、南仏の明るい陽光に魅了されます。翌年には、「古いロココ風の客間で裸婦や人物像を描くのが楽しみで四年間滞在した」という海岸沿いのホテルで、居心地のよさそうな客室や、窓からのニース湾の眺めを描きました。当時熱心に練習していたヴァイオリンが描きこまれることもあり、ニースでの日々の暮らしがうかがえます。1921年以降はアバルトマンを借り、本格的にアトリエを構えました。ホテルとは異なり、自由に室内を飾り付けることが可能になると、独自の探究をより深めていきます。

アンリ・マティス《ヴァイオリン・ケースのある室内》1918-1919年 油彩／カンヴァス 73.0×60.0cm
ニューヨーク近代美術館蔵 The Museum of Modern Art, New York, Lillie P. Bliss Collection,
1934 ©2019, Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence





3 観る者をそれぞれの「楽園」へ といざなうふたりの芸術の到達点

〈睡蓮〉— 循環する自然

モネが理想を実現した庭で描いた連作の集大成となったのが〈睡蓮〉であり、今日では世界中に200点を超える作品が残されています。水面に反映する瞬間的な光の微細なニュアンスを捉えたひとつひとつの作品には、一日のさまざまな時間やそれぞれの季節に特徴的な光の効果が記録されています。自らの個展でモネ自身が幾度となく試みたように、同じ主題をとりあげた作品を一堂に会し、連作を全体として見せることで、時間や季節の移り変わり、すなわち自然の循環を提示する点にこそ、モネの〈睡蓮〉制作の目論見がありました。オレンジュリー美術館の楕円形の部屋に設置された名高い装飾画は、このような試みの到達点として位置づけられます。



トンド形式と呼ばれる円形の画面には、鑑賞者の視線を中心部に集める効果があります。本作品は、1909年の「睡蓮 水の風景連作」と題された個展の出品作です。その際には、方形の《睡蓮》とともに、円形のものも4点ほど展示されていました。

上：クロード・モネ《睡蓮》1917-1919年 油彩／カンヴァス 100.0×300.0cm マルモッタン・モネ美術館蔵
Musée Marmottan Monet, Paris ©Musée Marmottan Monet, Paris, France/Bridgeman Images
中：クロード・モネ《睡蓮》1907年 油彩／カンヴァス 径80.7cm サン・テティエンヌ・メトロポール近現代美術館蔵
Musée d'Art Moderne et Contemporain de Saint-Étienne Métropole
©Yves Bresson/Musée d'Art Moderne et Contemporain de Saint-Étienne Métropole
下：クロード・モネ《睡蓮》1919-1920年 油彩／カンヴァス 100.0×300.0cm マルモッタン・モネ美術館蔵
Musée Marmottan Monet, Paris ©Musée Marmottan Monet, Paris, France/Bridgeman Images



楽園の創出 — 絵画を超えて

マティスは晩年、芸術家としての名声を徐々に高める一方で苦難に見舞われます。病を患い大手術を受けたほか、第二次世界大戦により疎開を余儀なくされるなどの心労が重なりました。しかし、「私が夢見るのは心配や気がかりの種のない、均衡と純粋さと静穏の芸術だ」と述べたとおり、マティスは鑑賞者が癒されるような芸術を生涯追求しました。85歳で亡くなるまで、絵画にとどまらず、礼拝堂装飾や、タペストリー、挿絵本など制作活動は多岐にわたりました。

病身となった晩年のマティスが取り入れたのが、手元ではさみを操るだけで制作できる切り紙絵の手法です。マティスの切り紙絵をもとに、シルクスクリーンで制作された《オセアニア》には、「空間は私の想像力だけの広がりをもっている」というマティスの言葉のとおり、かつて旅したタヒチの島や珊瑚、黄金に輝く光などの記憶が無限に広がっています。

《オセアニア》(1946年 シルクスクリーン／リネン)の元となったマティスのアトリエの壁面。壁2面全体に切り紙絵が展開されている。この切り紙絵の配置通りに製版されたのが本作。マティスが、ツバメの切り紙絵で壁のしみを隠すようにピン留めたことが、制作のきっかけだったという。



上：アンリ・マティス《オセアニア 空》1946年 シルクスクリーン／リネン 165.0×355.0cm 滋賀県立近代美術館蔵
中：制作中の《オセアニア》パリのモンパルナス大通りのアトリエにて、1946年 写真 エレーヌ・アダン撮影 アンリ・マティス・アーカイヴズ Photo: Archives Henri Matisse
下：アンリ・マティス《オセアニア 海》1946年 シルクスクリーン／リネン 165.0×376.5cm 滋賀県立近代美術館蔵



ひ

み

つ

PROFILE

Claude Monet × Henri Matisse

光を追いかけて、選び抜かれた場所のひみつ

生涯を通じて光の効果の描き分けを探究したモネが理想としたのは、穏やかで柔らかな、繊細な北フランスの光でした。パリの北西にあるジヴェルニーは、あるがままの自然がそのまま残された場所であり、ジヴェルニーへのある訪問者は、この地を「地上の楽園」と形容しています。さまざまな光を描き分けるうえで、自らの管理の行き届いた環境で風景画の制作を続けることには利点がありました。光の表現を左右する気候のささいな変化にも細やかに対応することができ、さらには現実の風景における画家の意にそぐわない部分に手を加えることができたのです。

クロード・モネ《睡蓮の池》1899年 ポーラ美術館蔵



光の移り変わりよりもむしろ普遍的な光の輝きそのものをとらえようとしたマティスにとっては、ニースの南仏の陽光の明るさとともに、その安定性が重要でした。あるインタビューのなかで、ニースの魅力について聞かれたマティスは、「絵を描くためには何日か同じ状態である必要があり、私はコート・ダジュールの雰囲気のみでしかそれができないのです」と話しています。また、パリでは激しく展開する最新の美術動向や展覧会から有意義な刺激が得られるものの、一方でそれに煩わされる辛さを感じていたマティスにとっては、ニースの静かな環境も必要な要素でした。

アンリ・マティス《ヴァイオリン・ケースのある室内》1918-1919年 油彩／カンヴァス 73.0×60.0cm
ニューヨーク近代美術館蔵
The Museum of Modern Art, New York, Lillie P. Bliss Collection, 1934
©2019. Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

身の回りに集められた、好きなもののひみつ

モネは睡蓮の画家として広く知られています。しかしながら、モネが興味を示した植物は睡蓮だけではありません。庭師を雇って世界各国のさまざまな品種、色とりどりの植物を育てることで、モネはお気に入りの色彩ばかりを描き出すことができたのです。花壇で花々を育てただけではありません。自らの温室では熱帯性の植物を、そして造成した池では水生の植物を育てるといったように、庭づくりに精を出した結果、モネの庭は園芸雑誌に特集として掲載されるほど有名になります。この特集号において、ある専門家はモネの庭を評して、次のような言葉を残しています。「モネの最も美しい作品とは、私の考えでは、彼の庭である」。

クロード・モネ ジヴェルニーの家の庭にて 1915-1920年頃 写真
©Pierre Choumoff/Roger-Viollet



織物産業の盛んな町に生まれたマティスは、ヨーロッパから中東、アフリカに至るまで、古今東西問わず大量のテキスタイルを収集し、制作の場でも欠かせないものとして活用していました。モデルに着せる衣装を近所のデパートで自ら選んだ布地で裁縫したり、オダリスクの主題を描く際にエキゾチックな空間演出のために設えたりと、テキスタイルが制作に活用された例は数多くあります。マティスは装飾的なテキスタイルを重層的に組み合わせることで、空間に複雑な面白みや変化を与え、現実よりも広がりや深みのある空間を創造しようとしていました。テキスタイルはマティスの愛したモチーフであるだけでなく、表現の根幹にかかわるものでした。

モデルのジタを描くアンリ・マティス、ニースのシャルル＝フェリックス広場1番地にて 1928年 写真 アンリ・マティス・アーカイヴズ Photo : Archives Henri Matisse

積み重ねられた年月の果てに。晩年のアトリエのひみつ

モネはジヴェルニーの敷地内にいくつものアトリエを構えました。邸宅の中にあったのが最初のアトリエであり、この部屋の壁にモネは数多くの自らの作品を飾っていました。二番目のアトリエは1900年頃に設置されており、邸宅の近くの離れとして整えられています。北向きの大きな窓と部分的にガラス張りの施された屋根にある窓のために、ふんだんに光を採り入れることのできたこのアトリエは、モネが一番好んだ仕事場所であり、友人や画商、そして訪問者が数多く招かれました。三番目の邸宅に隣接した広大なアトリエは、睡蓮を主題とした大型の装飾パネルを制作するために設えたものです。晩年のモネは、眼の病を患いながらも、睡蓮の池のほとりで獲得した日々の光の効果を生きたアトリエの中で実現する試みにあくなき取り組みました。

クロード・モネ、アトリエのなかの睡蓮の作品の前にて 1918年頃 写真 RDA/PPS通信社



マティスは1941年に受けた十二指腸がんの手術により、長時間の立仕事や遠出が難しくなりますが、収集したテキスタイルや観葉植物、鳥かごなどを自身の部屋に置くことで、いつでもそれらのモチーフを観察し、着想を得て、制作に活かせるようにしていました。1938年からアトリエを構えていたニースのレジナ・ホテルの室内では、巨大な鳥かごに300羽以上の小鳥を飼っていた時期もあったほどです。若い頃からの壁掛けや調度のコレクションに加えて、自分を心から楽しませてくれるものを集め続けたマティスのアトリエは、ますます豊かに彩られていきました。

アンリ・マティス、ヴァンスのル・レーヴ荘にて、フランス 1948年 写真 Michel Sima/PPS通信社

クロード・モネ(1840-1926)

出身地：パリ生まれ。幼少期から青年時代まで、フランス北西部の港町ル・アーヴルで過ごす。
絵画との出会い：画家ブーダンとの出会いを通じて、戸外で自然を直接描くことを学ぶ。
流派：印象派。
得意な画題：風景画。
晩年： 移ろいやすい光の効果を追いかけて、〈積みわら〉をはじめとする連作形式での制作に力を尽した。40代から定住したジヴェルニーは終の住処となり、86歳で亡くなるまで、自邸の庭の池に浮かぶ睡蓮を描くことに没頭した。

アンリ・マティス(1869-1954)

出身地：フランス北部の織維産業が盛んな町ル・カトー＝カンブレジ。
絵画との出会い：20歳の頃、病氣療養中に母親から絵具箱を贈られたことがきっかけ。パリに出て美術を学ぶ。
流派：フォーヴィスム(野獣派)。
得意な画題：室内画、人物画。
晩年：1917年以降は南仏のニースとその近郊を拠点とした。線描と色彩の調和を探究し、晩年には切り紙絵の手法を用いて、挿絵本や礼拝堂装飾などジャンルを横断して制作した。

楽園のひみつ

Claude Monet × Henri Matisse

世界的に広く愛好されているモネの《睡蓮》ですが、モネの油彩画を下絵とした絨毯が製作されたのはご存知でしょうか。製作元は、国立ゴブラン製作所というフランスの国立機関であり、この機関は伝統的なゴブラン織りをはじめとして、公的な施設の壁を装飾するためのタペストリーを製造し、管理していました。その図案としてモネの《睡蓮》に白羽の矢を立てたのは、長年にわたって美術批評においてモネを擁護するとともに、1908年にこの機関の長に任命されたギュスターヴ・ジェフロワでした。翌年のデュラン＝リュエル画廊での個展の際に、部屋一面に展示された〈睡蓮〉の連作を目の当たりにし、感激したジェフロワは、モネの絵画を下絵とした大型の絨毯の製作を思いつきましたが、これは実現しませんでした。紆余曲折を経て製作されたのが現存する方形の二つの絨毯であり、これらは現在でも国立ゴブラン製作所の後身であるモビリエ・ナショナル(国有動産管理局)に収蔵されています。国立の機関によって製作されたこの作例は、社会的に名声を確立したモネという画家を再考するうえで、貴重であると言えるでしょう。



上：クロード・モネ(下絵)《睡蓮》1911-1913年 絨毯(ウール) モビリエ・ナショナル蔵 Mobilier national, Paris ©Mobilier national/Isabelle Bideau
下：クロード・モネ(下絵)《睡蓮》1911-1913年 絨毯(ウール) モビリエ・ナショナル蔵 Mobilier national, Paris ©Mobilier national/Isabelle Bideau

《睡蓮》の絨毯？
ギュスターヴ・ジェフロワとの友情



世界初！
《リュート》の油彩とタペストリーが揃う

1946年、国立ゴブラン製作所は、長い伝統を持つタペストリーに新たな風を吹き込むため、マティスに下絵を依頼しました。その際、マティスは1943年に描いた、装飾模様に満ちた明るい赤色の室内画である《リュート》を下絵に選びます。楽器を奏でる女性という古典的で優雅な主題やあざやかな色使い、装飾模様が目を惹く構成などが、タペストリーにふさわしいと考えたのです。作品はすでに手元を離れていたため、雑誌に掲載された複製図版を拡大してプリントし、下絵を制作しました。マティスはゴブラン織りの染めの担当者と長時間に及ぶ打ち合わせを重ね、ともに糸の色を選ぶなど、積極的に関わりました。タペストリーは2点制作され、1点はモビリエ・ナショナルが保管し、もう1点は画家に贈られたのち故郷のル・カトー＝カンブレジのマティス美術館で保管されてきました。本展覧会は、制作時にすら揃うことのなかった油彩画とタペストリーの全3点が一堂に会する世界初の機会となります。ジャンルを横断してマティスの芸術が広がる様子をご覧ください。



上：アンリ・マティス《リュート》1943年 油彩／カンヴァス ボーラ美術館蔵
下：アンリ・マティス(下絵)《リュートを持つ女性》1947-1949年 タペストリー(ウール) モビリエ・ナショナル蔵 Mobilier national, Paris ©Mobilier national/Isabelle Bideau